

小檜山政克教授の略歴と著作目録

略 歴

- 1926年3月28日 東京で生まれる
- 1948年3月 東京商科大学予科修了
- 1951年3月 同大学本科卒業
この大学はその後一橋大学となった。
予科では高島善哉教授の経済通論の講義を聴いた。
本科では大塚金之助教授のゼミナール（社会思想史）に入った。
学生時代にしたことは、K.マルクスの『資本論』3巻を原書で読んだこと、それから予科および本科の学生自治会の責任者として学生運動に参加したことだけである。
終生深い影響を受けたのは、人間的には上原専禄、思想的には大塚金之助、その他に高島善哉、西沢富夫、松川七郎、金子幸彦の諸先生である。
- 1952年9月—53年5月 世界経済研究所員
この研究所では、小椋広勝、岡倉古志郎、佐藤定幸氏ら諸先輩の指導を受けた。
- 1956年9月—63年10月 モスクワ国際関係大学助教授
- 1957年6月—59年6月 ソ連邦科学アカデミー世界経済国際関係研究所員
この研究所では、Y.ペウズネル氏の指導を受けた。
- 1963年12月 モスクワ大学経済学部大学院に入学
ここでは、政治経済学講座に属し、講座主任のツェゴロフ教授、副主任のシュクレードフ助教授（当時）の指導を受けた。なお論文指導教授は当時世界経済国際関係研究所副

- 所長でモスクワ大学教授を兼ねていたS.メニシコフ教授。
 同大学院修了
- 1967年6月
 1967年12月 モスクワ大学経済学部教授会の学位論文審査に合格して経済学博士候補の学位取得
 学位論文のテーマは『第二次世界大戦後の資本主義の経済恐慌の特殊性』（この原文はロシア語で書かれたものであるが、のちに日本語に翻訳して『戦後経済恐慌の性格』として岩波書店から出版した）。
- 1970年4月—71年3月 法政大学経済学部講師（非常勤）
 1970年4月—71年3月 本州大学講師（非常勤）
 1971年4月 立命館大学経済学部助教授
 1972年4月 同大学経済学部教授
 1974年4月—75年3月 愛媛大学法文学部講師（非常勤）
 1979年4月—81年3月 立命館大学大学協議員
 1981年10月—83年3月 立命館大学経済学部長兼経済学研究科長
 1985年4月—9月 立命館大学国際学術交流委員長
 1988年4月—8月 英国および東欧諸国・ソ連に留学、各国の研究者と交流
 1991年3月 立命館大学を定年退職

所属の学会は、経済理論学会（1980年9月—83年3月 学会幹事）、
 社会主義経済学会、経済学史学会、経済学教育学会

研究業績

〔著書〕

- 『戦後経済恐慌の性格』 岩波書店，1970年
 『社会主義経済論』 同文館，1975年
 『価値法則と独占価格』 新評論，1984年
 『現代の経済原論』（田中宏道，山本幹夫，佐々木秀太，
 竹味能成の諸氏と共著），新評論，1986年

〔論 文〕

「相克する計画経済と利潤方式」 【東洋経済】，1969年9月6日号
 「社会主義の現段階」 越村信三郎，石原忠男，古沢友吉編著『現代資本主義
 の構造分析』，同文館，1972年の第4編
 「ソ連経済改革と“商品・貨幣関係”」

一橋大学経済研究所『経済研究』，第24巻第1号，1973年1月
 「恐慌論の学び方」 【経済】，1976年5月号
 「景気循環の変容としてのスタグフレーション」 【経済】，1978年1月号
 「労働価値論と需要供給の問題」

【立命館経済学】，第27巻第4号，昭和53年10月
 「平均利潤率と需要供給の関係について」

【立命館経済学】，第28巻第3・4・5号，昭和54年12月
 「二つの独占理論，——白杉庄一郎氏とルダコワ女史——」

【立命館経済学】，第30巻第3・4・号，昭和56年12月
 「マルクスにおける“所有”概念の展開」

中央大学『商学論纂』第28巻第5・6号，昭和62年3月
 「現代の産業構成と労働価値論」

【立命館経済学】，第38巻第3号，1989年8月
 「サービス労働・商業労働の価値形成性，——『資本論』の批判的分析——」

【立命館経済学】，第39巻第2号，1990年6月

〔海外学界動向紹介〕

「最近のソ連の恐慌研究」 【土地制度史学】，第45号，1969年10月
 「最近のソ連学界における“経済的社会構成体”の研究」

【立命館経済学】，第25巻第2・3号，昭和51年8月

〔学 界 報 告〕

「独占と恐慌，——“現実の恐慌”への接近方法について——」（経済理論学

会第23回大会共通論題での報告，1975年10月，——経済理論学会編『現代資本主義と恐慌』（経済理論学会年報，第13集，1976年，青木書店）に収録）

「マルクスにおける“所有”概念の展開」（中央大学『商学論纂』第28巻第5・6号，昭和62年3月，に発表した小檜山の論文）についての「大野節夫氏のコメントにたいするリプライ」，（マルクス・エンゲルス研究者の会研究例会での報告，1989年11月，——『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』，第10号，1990年6月に収録）

「社会主義思想の命運」（立命館大学退任記念講義，1990年12月，——『立命館経済学』，第39巻第6号，1991年2月に収録）

〔書 評〕

古川哲著『危機における資本主義の構造と産業循環』（有斐閣）の書評（『エコノミスト』，1970年3月3日号）

井村喜代子著『恐慌・産業循環の理論』（有斐閣）の書評（『朝日ジャーナル』，1973年6月29日号）

『大塚金之助著作集，第3巻，“世界恐慌”』の「解説」（1981年1月，岩波書店）

白杉庄一郎著・一井昭編『価格の理論・景気循環論』（中央大学出版部）の書評（『経済』，1990年4月号）

〔そ の 他〕

「恐慌は今もあるのか，——その周期と新しい現象」（『朝日新聞』，昭和46年3月17日夕刊，文化欄）

「戦後経済恐慌研究についてのひとつのアプローチ」（ダイヤモンド社『エグゼクティブ』，No. 79，1971年3月号）

「マルクス経済学の基本的性格」（立命館大学経済学部『経済学学習のてびき』，1982年4月）

文献解題「マルクス『資本論』」（立命館大学経済学部『経済学学習のてびき』，1982年4月）

「ロンドン雑感」（立命館大学経済学部『イーコン』，18号，1988年12月15日）

「欧州マルクシストとの対話」（『大塚会会報』，No. 13，1988. 12）

「現実をリアルに把握できる経済理論を！」（現代経済学研究会の紹介，『立命館学園広報“UNITAS”』，第219号，1990年5月）